

特集

デジタル時代を導く

読み・書き・そろばん

『読み・書き・そろばん』と聞くと、昭和のほこりをかぶった標語に感じられるかもしれません。しかし、江戸の寺子屋から受け継がれ、日本を一足飛びに先進国へ押し上げ、戦後の高度経済成長を支えた原動力でもあったように、現代においてもなお「理解力・表現力・計算力」を養う優れた訓練方法です。本特集では、デジタル・AIが席卷する今も求められる、『読み・書き・そろばん』の効果について探ります。



子どもが熱中する

音読と暗唱

受動的な動画 積極的な読書

1953年にNHKが日本初のテレビ放送を開始した当時、「一億総白痴化」という強い警句が生まれました。これは、テレビの低俗性や受け身な視聴方法が想像力・思考力を弱めることを危惧し、社会評論家の大宅壮一氏が投げかけた言葉です。実際、テレビのような映像＋音のメディアは、**「じつくり考えさせる」**より**「分かりやすい見せ方」**が重視される傾向にあります。

近年はテレビに加えて、Youtubeを含めた動画提供サービスが増え、電車の中の広告でさえも動画になるくらいです。動画を全く見ないという人はほとんどいないと言っていいでしょう。いつでも気軽に分かりやすく情報を伝えてくれる動画の視聴は、受動的で楽な行動です。

一方、読むという行為は、単に一文字ずつを認識するだけでなく、文字の並びを文章として理解し、著者の言わんとすることに思考を巡らせる積極的な行動です。行に戻る、立ち止まって考える、余白に疑問や要

点を書き込む——こうした小さな操作が、理解を深くします。見出しや図表に頼りすぎず、段落ごとに「何が言われているか」を自分の言葉で言い直す。受け身の視聴と違い、読むほどに思考の筋道を自分で作り替えていけるのです。

音読と暗唱が言葉の型を体に刻む

ここでおすすめるしたいのが、音読です。音読は「声に出して読むこと」でも、それだけではありません。目で文字を見て、口で声にして、耳で聞き返す。体のいろいろな感覚を一度に使う読み方です。だから、ただ黙って読むよりも、意味が分かりやすく、覚えやすくなります。ゆっくりでもかまいません。大事なものは、言葉の形と意味が自分の中で結びつくことです。

音読とよく似た言葉に「暗唱」があります。暗唱は、一度覚えてから見ないで言うこと、つまり音読の延長です。暗唱のよさは、まず「言葉の型」が体に入ることです。名文や詩には文章の持っている響きやリズムがあります。声に出して繰り返すうちに、そのリズム

